

# 幼児期における日本語の時制の概念について —3歳前後の幼児における初歩的観察報告<sup>\*1</sup>

但馬 香里<sup>\*2</sup>

## Understanding the Concept of Japanese Tense and Aspect in the Early Childhood: A Primary Observation of Three-year-old Children

Kaori Tajima<sup>\*2</sup>

**Abstract:** This study will observe the acquisition of tense and aspect in the three-year-old Japanese children. Through interactions with parents or relatives or any surroundings, children acquire the ability of their language and communication. However, they often use their language ungrammatically. From our data, children sometimes confuse the concept of tense and aspect. They can use the present tense perfectly, however, they sometimes misuse the future and the past tense. We found that it is because the ambiguity of Japanese expressions of tense and aspect. We also found that gestures or any clues performed by children are very useful to understand what they want to say truthfully.

### 1. はじめに

生まれて間もない乳児を観察してみると、彼らは自分の意志で手足を動かすことがままならない状態にあることがわかる。まだ視力が不安定なために、視野は狭く、かろうじて光彩（光の明暗）が認識できる程度であり、視覚的な情報も十分に得られていない。さらに、全ての面において、外部との初めての接触の連続により、常に不安定な状態にさらされている。ましてや、言語の使用に関しては、まったくの白紙の状態であるため、泣くということ以外に音声を発する方法も理解していないのである。

ところがその子供たちは、わずか数年もたたないうちに、一様に母語である第一言語を、文法構造も含めてほぼ完璧に獲得し、使いこなせるようになる。この飛躍的な能力の発達は驚くべきことである。

本観察報告では、ケーススタディとして、

幼児期のある段階における言語を観察しながら、どのような要素が子供の言語発達と言語習得に深く関わっているのか、という点について考察を行うものである。

今回は、まだ幼稚園には入園していない3歳児、すなわち、集団生活を経験する前の段階の幼児を観察し、その報告を行うものとする。彼らの言語使用能力が、どの程度のものかを簡単に説明すると、日常生活の中では大部分においてことばを使ったコミュニケーションをスムーズに行うことができるが、時々大人が「あれ？」と思うような、幼児独特の言語的間違いを行うことがあり、まだ完全には母語の習得がなされていない状態である。このような事例の中から、今回は特に、文法的に誤った使用方法が頻繁に見られる時制に着目し、観察を行うものとする。

<sup>\*1</sup> 初歩的観察報告としたのは、被験者およびデータの数が限られていたことによる。

<sup>\*2</sup> 東京工芸大学工学部 基礎教育研究センター非常勤講師  
2005年9月13日 受理

## 2. 問題提起

### 2. 1 先行研究

子供の言語習得に関しては、これまでさまざまな側面から多くの研究がなされてきた。例えば、小嶋(1999 桐谷編)は、こどもの言語習得を研究する分野をまとめているが、その範囲は、音声と音声言語の発達に焦点を当てたもの、語彙獲得の諸問題について焦点を当てたもの、言語間の比較とそこから波及して第2言語の獲得に着目したもの、そして認知と言語の関係について述べられたものなどが挙げられる。

日本語獲得児の語彙の研究については、動詞優位か名詞優位かという議論が数多くの先行研究の中でなされているようである。また、助詞の誤用の研究においては、横山(1997 小林、佐々木編)は、最初の誤用は1歳9ヶ月に起こり、その後は2歳代に入ると急速に高い頻度で産出されるようになり、観察終期の3歳5ヶ月でも、なお誤用は起きているとある。

### 2. 2 問題提起

それでは日本語を獲得するプロセスにおいて、助詞以外のどのような言語的側面で幼児はつまづき、そして間違いをおかしているのだろうか。

子供の発話が増えるにつれ、親と子は、ことばを使ってコミュニケーションを行う機会が増えてくる。そして、3歳初期の段階で、ようやく人間らしい会話のやりとりがスムーズに行われるようになる。しかしこの時期は同時に、しばしば子供のことばには誤用があるということに気がつく時期でもある。本観察報告では、ことばの誤用の中で、特に時制をあらわすことばの誤用に着目して観察を行うこととする。

時制に関する研究として、Comrie (1976)は、時制には *tense* (テンス) と *aspect* (ア

スペクト) があるという。

The tenses referred to so far have all related the time of the situation described to the present moment. ....  
As the general definition of aspect, we may take the formulation that 'aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation'. (1976: pp2-3)

簡単にまとめると、テンスは、ある出来事を説明する際に、発話者の基準点を現在とみなし、そこから起点して、時に関する状況を示すというものである。

これに対してアスペクトは、ある出来事を異なった角度で見ており、その出来事の開始から終わりまでを発話者が捉えた状況を示すものである。例えば、英語の 'He was reading a book.' 「彼は本を読んでいた」と 'He read a book.' 「彼は本を読んだ」の違いがこれにあたる。

しかしながら、日本語では英語のように時制の表現が文法上、目に見えて明らかなのではなく、むしろあいまいなために、幼児が言語習得をする際に、頻繁に誤用表現としてあらわれているのではないだろうか。この点について考えてみたい。

## 3. 調査および結果

### 3. 1 データ

調査を行うにあたり、以下の3名の発話を観察した。対象となったのは、2歳11ヶ月の男児、3歳0ヶ月の女児、および、同月齢の男児の合計3名である。尚、父親は、平日は仕事のため日中は不在であることが多く、結果として全てのやりとりは日本語を母語とする母親と子供の会話という状況のもとで観察が行われた。

3名の子供たちは、全員が都内の同じ社宅

に住んでおり、敷地内の公園でほぼ毎日一緒に遊んでいる遊び仲間である。

本報告では、初歩的観察報告ということであるため、データは著者の観察および、母親の協力を得て収集されており、その数は限られているが、こうした母と子のやりとりのうち、文法的に間違いが多かった時制に関する事例について取り上げて、分析および考察を行うこととする。

### 3. 2 結果

それでは実際に観察した例を挙げながら、子供が現在、過去、そして未来の時制をどのように表現しているのか、そしてどの程度理解しているのかという点について見ていくこととする。

#### 3. 2. 1 現在時制について

ものごとが今現在進行しているという状態は、子供にとって最も身近な存在であり、把握しやすいものであるといえる。

例1) は、子供が電話口で祖母に何をしているのかと聞かれた際に、今現在食事中であることを報告しているものである。

例1)

子供：「(電話口にて祖母に) 今、ごはん食べてまーす」<sup>\*3</sup>

この例にあるように、「今」ということばを使うことによって、子供は現在起きていることを説明することができる。この例にあるように、「今」が正しく使われていることから、現在という認識がきちんと把握できていると言える。このことは3名の幼児に共通しており、現在時制に関する誤用は見受けられなかった。

#### 3. 2. 2 未来時制について

ところが、まだものごとが行われていない未来についての概念は、子供たちの認識がまだ不安定なことがわかった。例2) では、母親が子供に明日という未来のできごとについて述べているが、子供はそれを理解していないという例である。

例2)

母親：「明日、お友だちが遊びに来るよ」

子供：「いつくるの？」

子供の応答だけを見ると、「明日の何時に友だちが来るのか？」というように捉えられるかもしれない。しかしここで子供が述べている「いつ」は、「今日の何時ごろか」という意味で述べていることがフォローアップインタビューでわかった。すなわち、この子供にとっては、「明日」という単語は未来をあらわすということは理解できているのだが、それが具体的にどの位の未来のことなのか、ということについては具体的に想像ができていない。その結果、今から数えて近い将来である数時間後のことだと考えたのである。

例3)

母親：「明日になったら行こうね」

子供：「もう明日になっちゃったの？ 今日は明日なの？」

例3) は、子供が以前母親の言った事を覚えていて、当日になってから述べられたものである。ここでは、未来をあらわす「明日」と、現在をあらわす「今日」が、実際は時間の経過によって変化し、それに伴いことばも変化するということがまだ理解されていないために、このような発話になったと考えられる。その結果、「明日は今日になる」という概念が、ことばの上で混乱している状態であらわれてしまったといえよう。例えて言うならば、子供にとっては、「花」と「鳥」が全く個別のものであるのと同様に、「今日」ということばは

<sup>\*3</sup> 例文における括弧は筆者による補足説明であり、注目した部分には下線を引いた。

「明日」には置き換えられないのだ。

### 3. 2. 3 過去時制について

最後に過去時制についての事例を見て行きたい。まだ未体験の未来とは違い、過去の出来事はすでに経験したものであるから、子供にとって理解しやすい概念かと思えるのだが、実際はまだ完全には理解されておらず、誤用が多々見られることがわかった。

#### 例4)

子供：「今日、お祭り行っちゃったねー」

母親：「この前でしょう？」

子供：「前、お祭り行っちゃったねー」

例4)のように、子供が母親に自分の体験を報告する発話は、日常的に数多く見られる。しかしこの例では、過去の出来事を「今日」と述べていることがわかる。このことは、子供にとって、過去という時間軸も未来と同様、想像が難しいということを示すものである。また、「この前」という単語は子供には理解しがたいものらしく、母親が言い直した後の繰り返しでも、「この」を省略していた。

#### 例5)

母親：「今日はどこに出かけたの？」

子供：「今日、パパとお店屋さんに行ってきた」

例5)では、母親の問いに対して子供は「今日」ということばを使っているが、その内容は先週行ったお店について語っている。ここでも、過去と現在の認識が混乱していることがわかる。

次の例6)と例7)も同様に、過去の出来事が具体的な時間軸として理解できていないためにおこった誤用の例である。

#### 例6)

子供：「さっきセミを見つけちゃったねえ」

母親：「昨日セミを見つけちゃったねえ」

#### 例7)

子供：「昨日、『お誕生日おめでとう！』ってパチパチした（手をたたいた）ねえ」

母親：「この前でしょう？」

例6)における「さっき」と例7)の「昨日」はどちらも過去の出来事を説明する際に使う単語だということは、子供には理解されているようである。しかし、その具体的な時間軸の認識、すなわちどれ位前の出来事なのかという点については、まだ理解が不十分であるようだ。ただ、「さっき」も「昨日」も、数日前の出来事を示す場合に使われることもあるが、「さっき」の方が比較的最近の過去のことについて述べることが多く、子供なりに使い分けをしているようである。

これまでの結果をまとめると、幼児は現在時制について理解はしているものの、未来時制と過去時制についての習得はまだ完全にはなされていないことがわかった。

毎日の生活において、子供が自分の経験した内容を大人に報告する場面は非常に多く、特に印象に残っている出来事や嬉しかったことを経験した時には、一生懸命報告をする。しかし、時間の経過と語彙の理解がまだ不十分であるために、とりわけ過去時制についてしばしば誤用が起きていることがわかった。

## 4. 考察

ではなぜ日本語を母語とする幼児にとって、時制を適切に表現することが難しいのだろうか？その答えとしては以下のような理由が考えられる。

第一に、日本語の副詞の意味的あいまいさあげられる。英語と日本語を比べてみればすぐにわかることであるが、英語では現在、過去、未来の時制がはっきりと区別されている。日本語も当然ながら、概念としては、現在、過去、未来が存在するのだが、具体的に副詞を使った表現は、英語に比べてかなりあいまいな部分が多いのではないだろうか。例

えば、「今日」という単語は、後続する動詞の形式によって、過去や未来の出来事を述べる際に使うことができる。例をあげると、

「今日、お花見行こうね」と言えば、まだ現時点の状況としてはお花見には行っておらず、今後の予定という意味で使うことができる。また、「今日、お花見に行ったね」と言えば、過去に経験した出来事として述べることもできる。

第二に、日本語における動詞の形式にも意味的なあいまいさがあることがあげられる。日本語における「タ形」の動詞は、過去の出来事のみならず、現在進行中の出来事を表現する際にも使われる。例えば、駅のプラットフォームに電車が到着しつつある状態を見て、「電車が来た」と言う事ができるし、帰宅してから、先ほどの出来事を思い出して、「今日、電車を見たね」という言い方もできるのである。このように、日本語の時制を表現する際に使われる、副詞や動詞の性質のあいまい性が、幼児の発話の混乱を招いていたのではないだろうか。

まとめてみると、日本語は、英語のテンスとアスペクトのようにしっかりとした区別がついておらず、そのあいまいさが起因して幼児が日本語を理解する際に混乱させていると考えられる。

最後に、幼児は生後まだ数年であるため、その体験も非常に限られたものであり、まだ社会化の途中であることが、幼児のことばの誤用に結びついていると考えられる。時の概念についても、自分が言いたいことがらが、どの位先のことなのかあるいは後のことなのかといった、具体的な状況を想像する能力が不十分である。そのために、独自の想像力による表現方法で会話を行い、結果として誤用が起こると考えられる。幼児がことばの習得する際には、周囲の環境、とりわけ子供に関わる大人との頻繁なコミュニケーションのやりとりが重要であると思われる。

子供とコミュニケーションを行う際には、大人が話し手になって聞き手である子供に理解させる場合もあるが、逆に大人が聞き手に

なって話し手である子供の内容を理解しようとする場合もある。この双方において、より具体的に理解を促すためにジェスチャー（身振り）を用いることも非常に重要なのではないだろうか。なぜなら、今回の観察は、子供の発話の中でわからない点は、指差しやその他のジェスチャーにより、（ああこれは先週の話をしているのだな）というように理解ができたこともしばしばあったからである。ただ、今回は残念ながらビデオ撮影を行っていないため、具体的にどのようなジェスチャーが起きているのかを示すことはできない。しかしながら、特に子供は、自分の語彙の不足分をジェスチャーにおいて補足している部分が大いのではないかと思われる。

## 5. おわりに

本観察報告では、幼児が母語を習得するプロセスにおいて、誤用がしばしば見受けられる「時制」の概念に着目し、観察を行った。その結果、現在時制の把握はなされているものの、未来時制と過去時制においては、まだ完全には習得されていないことがわかった。

今後の研究では、より詳細に親と子のコミュニケーションの仕方を観察するためにも、自然発話を録音（録画）して分析していきたいと考えている。

最後になったが、今回の観察報告を執筆するにあたり、貴重なデータをご提供いただいた方々に、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

## 参考文献

- 1) 1993. 喜多壮太郎. 「ことばとジェスチャー」『言語』Vol. 22, pp78-81. 大修館書店.
- 2) 1999. 桐谷滋編. 「ことばと心の発達」第2巻, 『ことばの獲得』. ミネルヴァ書房.

- 3) 1982. 國廣哲彌編. 「日英語比較講座」第4巻, 『発想と表現:』. 大修館書店.
- 4) 1976. Comrie, Bernard. *Aspect*. Cambridge University Press.
- 5) 1985. Comrie, Bernard. *Tense*. Cambridge University Press.
- 6) 1997. 小林春美、佐々木正人編. 『こどもたちの言語獲得』. 大修館書店.
- 7) 1990. 鈴木孝夫. 『日本語と外国語』. 岩波書店.
- 8) 1996. Slobin, Dan I. ‘From “thought and language” to “thinking for speaking”’, ed. John J. Gumperz, and Stephen C. Levinson, *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge University Press.
- 9) 1997. 中右実編. 「日英語比較選書」I, 『文化と発想とレトリック』. 研究社書店.
- 10) 2003. Bonvillian, Nancy. *Language, Culture, and Communication – The Meaning of Messages*, 4<sup>th</sup> ed. Prentice Hall.
- 11) 1992. McNeill, David. *Hand and mind, What Gestures Reveal about Thought*. University of Chicago.